

音楽教材「Music Workbook」における その制作の過程と実施経過の報告

青山雅哉・小川純子・上野稲子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Making of "Music Workbook" and its Application

Masaya Aoyama · Sumiko Ogawa · Touko Ueno

Naragakuen University Narabunka Women's College

ピアノ初心者に対する教材については様々なものがあるが、対象とする層への年齢や理解度によって、それら教材の表現方法や内容には大きな違いが見られる。この調査や研究によって、本学学生の特性に合った音楽教材の必要性を強く感じ制作することになった。この結果、音楽教材「Music Workbook」¹⁾と題し今年度4月に初版として発行することができた。これを制作するにあたり、本学学生への教材としてどのような内容が適切でそれをどのように表現していくのか、そうした点に多くの議論や検討を重ねて開始した。本稿はその制作過程と制作後の状況を報告するものである。

キーワード：音楽教材、ピアノ、音楽教育

1. はじめに

幼児教育学科の学生にとってピアノ学修は必須となるものである。しかし、本学学生のピアノ初心者達は、例年入学者の40%～60%程度の割合で存在している。これは、基本情報としてこれまでのピアノ学習の経験や楽器経験、また幼児期からこれまでに経験した場合の曲名等を入学時に学生にアンケートし計測している。

その上で、教材制作の検討にはピアノ初心者にあたる学生達の練習状況やその成果を各指導者から収集することから始めた。その内容として特に重要な点が浮かんできた。それは楽譜の音に音名を記入したり、YouTubeからの音源や指導者の演奏を基にして聞いたものをまねる状態、いわゆる耳コピーによる練習を行う状況が多く見られていることである。音楽のピアノ指導においては、各自に課題曲を提示し次の授業までにその成果を求めているが、この練習が単に曲を音にすることが目的となってしまう、練習過程を積み重ねて身につく譜読みや様々なテンポでのリズム感、正確な指の運動などが、身につく

このままでの練習となっている。そういったことが担当教員で話し合う中でもわかってきた。つまり、譜面に書かれたものを理解しないままに音にしてその場限りの作業となりがちであり、積み重ねて身につけていくべきスキルアップのない練習内容となっている。こうした理解を伴わない練習となってしまうことで、自ら考え出し、工夫することのできる音楽的応用力を十分に身につけることができない学習状況が判断された。こうした状況を、これから改善していくべき最重要事項として認識し、この教材制作にも反映するよう検討を行ってきた。そうして、音を正しく読むことができる力を確実に身につけ、その上でピアノ実技のレベルアップを図っていくことが必要であるとの方向性が定まった。

それを踏まえて、本学学生への音楽の基礎的教材として、「音を正しく、そして速く読める力」つまり読譜力を早く身につけていく内容を目指し制作を行ってきた。そのために音楽の根本となる「音の高さ」「音の長さ」に対する理解の徹底、ピアノ練習の根本にあたる基礎的な「指の運動」の徹底を3つの柱として考え、この柱に対してわかりやすく身につけていくための内容と表現を検討してこの教材の完成に至った。

以下に、この教材の各柱とする箇所について、その「制作の意図」とこの「授業による状況と効果」としてまとめてみることにした。

2. 音の高さの理解

2.1 制作の意図

譜面に書かれた音符をドレミ〜で認識し、それが鍵盤上のどの位置にあたるかがわかるということまでが、ピアノを学ぶ上での音の高さを理解しているということになる。

Music Workbook では、それを早く身につけるために五線上に表示される音符の規則を分解し、それを部分ごとに表記していくことで理解しやすく工夫した。つまり、五つの線上に音の高さを表すこと、音の高さをドレミファソラシのイタリア語の音名で読むこと、ト音記号上、ヘ音記号上での配置による音名を理解し、それが鍵盤上のどの位置となるのかといった

記号 ♮ はナチュラルといいます。
 ♯ (ナチュラル) は#や♭のついた音から鍵盤のすぐとなりにある音(半音)にもどす音を示します。
 鍵盤の位置を見て、音を理解していきましょう。

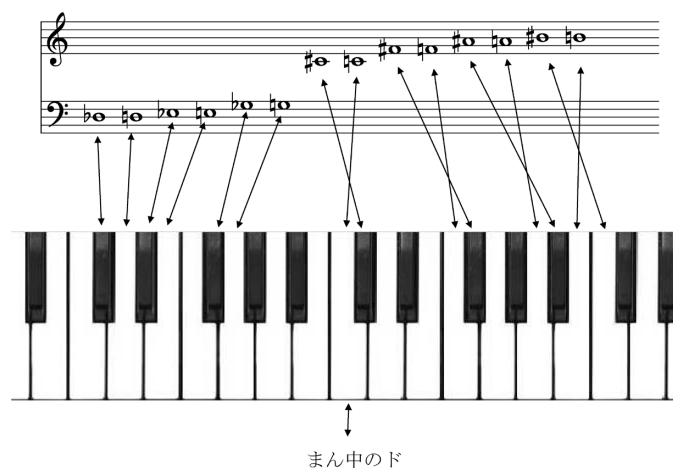


図1 臨時記号と鍵盤の位置

大きく3つに分けた表記として、それをわかりやすく解説していった。特に譜面上の音符と鍵盤上の関係については、その相互の関係が視覚的にわかることが必要であると考え、鍵盤図と音符を表示しその関係を矢印で示すことにした。また、臨時記号#♭りによる位置関係も同様に図として表した(図1)。さらに音名を課題にしたワークシートを提示している。そのワークによって繰り返して認識することで音の高さを身につけ、理解を深めていくように意図していった。

2.2 授業による状況と効果

五線上に表された音符の音名を読むことは経験のないものにとっては、初めて言語を学ぶことと同じように何度も繰り返すことで身につけていくものである。ピアノを弾くことは音符を読むこととそれに従って指を動かすこととの同時進行となる。そのどちらも欠けることのないように、それを補う練習が必要となる。まず、音の高さを理解させていくための Music Workbook を用いた講義では、五線と音符の関係、その音符のト音記号上、ヘ音記号上での音名、譜面上の音符が鍵盤上でどの位置になるのか、右手、左手の身体的特徴からどちらで処理することが相応しいか、鍵盤上の左右指使いについて、ト音記号やヘ音記号上で音が表記される理由等、講義内容を実際に電子ピアノ上の音にして弾いたり聴いたりすることで確認をさせていった。さらに、ワークシートの課題において、繰り返し実施することで理解を深めさせていった。

本学だけではなくピアノ初心者の実技教材としてバイエルが広く用いられているが、この教材の欠点としてト音記号での学習を第一段階としている²⁾。それによりト音記号が基準として定着し、ヘ音記号独自の音名が判断できにくくなってしまふことが、ヘ音記号への対処に苦勞する要因と考えられる。初心者にはト音記号、ヘ音記号での音名を同等に身につけていくことが望ましく、そのことにも十分配慮して実施してきた。

Music Workbook を教材としてその解説とその内容を身につけるためのワーク課題を果たした講義の終了後、音の高さへの理解についてどれほど獲得したかを本学I回生4クラス103人にテストにより確認した。テスト内容はト音記号、ヘ音記号による6音を示しその音名を答える形式で行った。テスト内容はそのほかに音符の名称、音の長さの計算、小節線による音の長さの設問等によるそれぞれの理解度を計っている。その結果、ト音記号上の音には学生の90%以上、ヘ音記号上の音には80%以上の理解率と判断し、Music Workbook への取組の効果を確認することができた。短時間で解答を求めたこともあり、ヘ音記号にはいくらか時間がかかってしまうこと、ト音記号との違いをまだ確実にしていない学生もいることの2点において今後の課題を確認し、今後の指導においてはト音記号へ音記号の説明にはバランスを配慮した指導、ワーク課題ではさらなる繰り返しを行う講義内容として検討していくこととした。

3. 音の長さの理解

3.1 制作の意図

読譜において、音の高さの認識とともに重要なものは、音の長さの理解と表現である。学習者は、音の長短を示す記号の音符・音の鳴らない時間を示す記号の休符について、その種類を覚え、相対的な長さの比率を理解し、正しく表現することを習得しなければならない。初心者には、音符・休符が音の長

さを示していることをまず理解させ、経験者に対しては複雑な音符・休符の組み合わせでも瞬時にリズムをとらえてテンポ良く表現ができるようになるよう指導すること、さらにその間にあたる途上学習者に対しては音符・休符の再確認や基本的リズムの読譜練習等、個々に合った補習方法を示すことが本学における指導目標である。

Music Workbook では、表示方法・解説・例題を出来る限りシンプルに表して初心者が抵抗なく音符・休符を覚え、感覚的に長さの違いを身につけられるよう工夫すると共に、経験者の学習にも役立つよう多様な難易度の練習問題を取り入れた。また、復習・補習に役立つよう、学習内容を小分けにし、練習問題も課題がはっきりとわかる構成となっている。なお、学習範囲は、全音符・二分音符・四分音符・八分音符・十六分音符・全休符・二分休符・四分休符・八分休符・十六分休符・付点・三連符とし、童謡の演奏・保育現場でのリズム遊びによく使用する記号のみとした。

〔音の長さ〕は

- A. 記号の提示と相関関係の説明（音の長さ - 1）
- B. 各記号の解説とワーク（音の長さ - 2～8）
- C. 練習問題（音の長さ - 9）

の三つのセクションに分けられる。

Aは、これから学習する記号の名称と長さの関係を示し、全体を把握させるページである。音符、休符それぞれを長さの順に並べ、音符には種類があり、それぞれが違う長さを示していることを表した（図2）。音符・休符の形の違いがひと目でわかるよう、大きなフォントを選択した。また視覚的に覚えられ

るよう矢印を使用し、説明は極力減らしている。ここでの指導は、記号を紹介し形と名称を覚えさせること、音符・休符・付点が音の長さを表しているということを理解させることにポイントを絞ればよい。

Bは一つずつの記号を1ページで詳しく学習することのできるセクションである。左右のページにはそれぞれ同じ長さの音符と休符を配している。なお、理解が難しいとされる付点については2ページの分量を充てている。①記号の紹介を大きなフォントで示し、②筆記練習、③長さの説明、④リズム練習といった構成とした。③はすべてのページに四分音符を基準としたリズム練習の譜例を置くことで、説明文なく感覚的に音の長さの相対的關係が理解できるよう工夫した。④は左右のページで学習した音符・休符を使用したリズム練習である。両手打ちの4小節が2題、ここでもなるべく4分音符・4分休符を登場させて、音の長さの関係を身体でつかみ、定着させるようにした。音の長さを読む難しさは、記号を認識すること・時間的身体的感覚をイメージすることを瞬時に行わなければならないことにある。そのため、Bのセクションでは初心者の学生に対して指導者がアドバイスをしながら一緒に学習させるとより一層効果的である。③で音の感じ方を言葉で表したり（タン、タン、やウン、ウン、等。指導者によって異なる）、同じ速さでリズムを打てない学生に対しては指導する側が4分音符のパートを担当したりその逆をすることでより早く理解することが可能である。一方、④のリズム練習は、片方のパートを補助するよりも、学習に必要な小節を区切って、両手練習を効率的に導くとよい。ピアノは両手指を

音符の長さは、右に進むと半分（1/2）、左に進むと2倍になります。

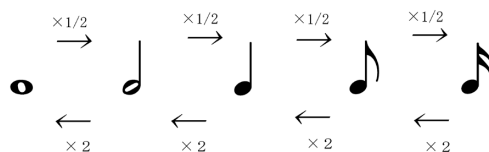


図2 音符の長さの関係

違ったタイミングで動かす楽器であるので、両手のリズム練習が必要だからである。部分練習ができるよう④の練習問題は1小節ずつ違ったパターンのリズムになっており、学生に合った必要な箇所を選択しやすくなっている。なお、③④ともに、音の長さを理解するまでは繰り返しの練習が必要不可欠である。これらの練習問題は初見で完了するようなものではなく、その時点で学習している記号の意味（長さ）を考えたり感じたりしながら正確に表現できるようになるまで繰り返し練習することで、良い理解と効果が得られるものになっている。Bでは記号の認識と身体的運動が確実に結びつくよう指導することが大切なのである。

Cは比較的上級者向けの問題である。ピアノ経験者・元吹奏楽部などの楽器経験者でもやりごたえを感じるような難易度の高いものが含まれている。もちろんセクションBをしっかりと習得すればできる問題なので、ステップアップの練習問題として指導者が選択して取り組ませるとよい。さらにこれらの練習問題は一つずつ異なった拍子で書かれているので、4分の4拍子・4分の3拍子・8分の6拍子等、拍子について学習する良い材料にもなっている。ここでの指導は、学生がより複雑なリズムを読むよう補助することと、拍子の説明が中心となる。ただしセクションBが理解・習得できていない学生には混乱を招く可能性もあるので無理に使用する必要はない。音の長さに関してはBで基本的な学習を完了することができるので、Cはあくまでもステップアップの教材としてとらえて欲しい。

3.2 授業による効果

前述の確認テストでの、音の長さに関する結果は以下のとおりである。

- a. 音符の名称（全6問） 6～5問正解…76%、4～3問…13%、2～1問…9%、0問…5%
- b. 音の長さの計算問題（全3問） 3問正解…50%、2問…8%、1問…17%、0問…22%
- c. 音の長さの計算問題（付点を含む）（全6問） 6～5問正解…40%、4～3問…10%、
2～1問…16%、0問…36%
- d. 拍子の理解（1問） 正解…54%、不正解…46%

a. は音符の記号を示し、その名称を書かせる問題である。正解率は高かった。小中高等学校で学習済みであるとともに、セクションBの①・②を使用した効果があったと考えられる。

b.・c. は、それぞれの音符の相対的関係を問う問題である。例えば ♪ + ♪ = のように音符の長さを数に見立て計算式を解き記号を一つ書き答えさせる（この場合の正解は♪）。高得点と0点の割合が高い。テスト終了後、学生の声から問題の意味が理解できなかったり、解き方がわからなかった学生が多かったことがわかった。テキストにはセクションAやセクションBの付点のページに計算式の例を載せているので、今後は解説だけにとどめず、演習をさせることが必要である。また付点を含む問題の正答率の低さにも注目しなければならない。付点は音符の付属記号なので学習が後回しになりやすいが、付点を含むリズムは乗りがよく、童謡や保育中の音楽に多く使用されているため、必ず理解しなければならない記号のひとつである。学習中の曲に付点のリズムが含まれている場合は、セクションBのリズム練習を繰り返し復習するなど Music Workbook を活用し、学生の習得のためさらに丁寧な指導を行いたい。

d. は旋律を4分の4拍子になるよう五線を小節線で区切る問題である(図3)。拍子とは拍を同じ間隔で区切り、音楽に秩序を与えるものであるため、常に正確に拍を数えることを覚えなければならない。

この問題では全部で3本の小節線を正確な間隔で配置しなければならないが、ひとつでも間違

4. C は4分の4拍子を表す記号です。次の五線に適切な小節線を入れよ



図3 拍子による音の長さの問題

えば不正解である。部分的に正解した学生は多いものの完全に正解した割合は低かった。セクションCで様々な拍子記号を示し学習の助けにしているが、基本学習のセクションBでも④のリズム練習は今回のテスト問題と同じ4分の4拍子である。Bの学習に入る始めに拍子の解説を行えば、拍子を感じながらのリズム練習ができるため、拍子感が養われると考えられる。

以上、テスト結果から Music Workbook の使用方法を具体的に検討することができた。指導者間で意見を共有し、今後の講義に役立てたい。

4. 指の運動

4.1 制作の意図

音の高さ、音の長さを理解する、と並んで初心者に必要なものは、スムーズな指の動きを確保することである。初心者の学生が毎日練習を続けるために、短く読みやすく覚えやすいテキストが必要と考え、指の運動となるエクササイズを作成した。

ピアノという楽器は両手で演奏することが求められるが、人間には利き手があり、そうでない方は動きも感覚も鈍い。また、右手と左手が違う動きをすることは初心者にとって非常に困難である。このエクササイズを作るにあたり、まず気をつけたのは、①両手を同じ音で練習する②指使いを明記する、の2点である。これは、同じ音であれば学生は指を動かすことに専念でき、また正しく使いやすい指使いで練習を始めれば、今後自分で指使いを考える時の指標となる、との考えからである。次に、前半は音の長さやリズムの変化を中心に、後半は童謡の伴奏に欠かせない左手による和音の基本形の練習と、調を理解するための音階練習を中心と考え10曲のエクササイズを作成した。なお、音階練習以外はどれも短く4～5小節で作成し、学生が簡易で繰り返して取り組めるような工夫をした。以下、エクササイズ制作の意図を順に述べる。(注：指番号は、両手とも親指が1で、順に番号が大きくなり小指が5となる)

・指の運動-1 (指使い) ド～ソの音を使った3度までの基本的な指の動き。初心者の4と5の指は弱々しい音しか出ず、また非常に動きにくい。そのため、3と4、4と5の指の連続は難しいが非常に大切な練習である。

・指の運動－2（音の長さ） 全音符から16分音符（付点を含む）までの種類の音符を組み合わせたド～ソの音階（図4）。これにより、音の長さで学習した内容を実際に弾いて確認する。



図4 指の運動2の3

・指の運動－3・4（4分音符と2分音符）（4分音符と8分音符）ド～ソの音を使い5度の音程まで広げた3種類の音符の組み合わせ（図5）。



図5 指の運動4の2



・指の運動－5（付点） 付点8分音符と16分音符の組み合わせ（図6.7）。幼稚園・保育所でよく用いられる生活の歌には、この組み合わせがとても多く出てくる。特に「おべんとうのうた」「さよならのうた」「はみがきのうた」は  と  という、初心者には弾き分けにくいリズムで作られた曲である。ここで、このリズムの違いをしっかりと習得する。



図6 指の運動5の1



図7 指の運動5の3

・指の運動－6（三連符、8分音符と16分音符） ド～ソの音を使った三連符と、8分音符と16分音符の組み合わせ（図8）。三連符は一拍を3等分するという不安定なリズムで難しい。きれいに等分で弾くには繰り返しの練習が必要である。

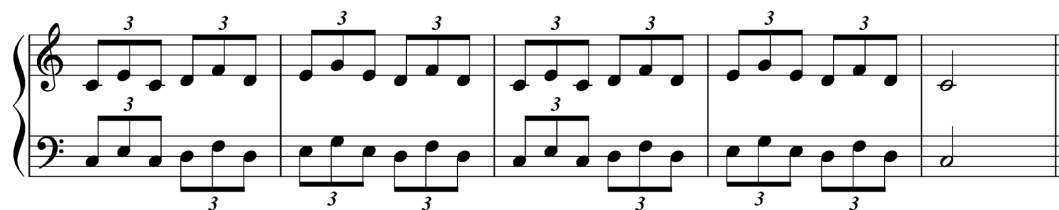


図8 指の運動6の2

・指の運動－7・9・10（音階①②③） ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調・イ短調の1オクターブの音階と、ド～ソで始まる調の音階（左手は音階と和音の2種類）（図9～11）。子どもの歌は、ハ・ト・ニ・への調が多く、各調の＃＼の数と位置をこの音階練習を通してしっかりと覚える。また、音階と和音の基本形も繰り返し練習をしながら覚える。

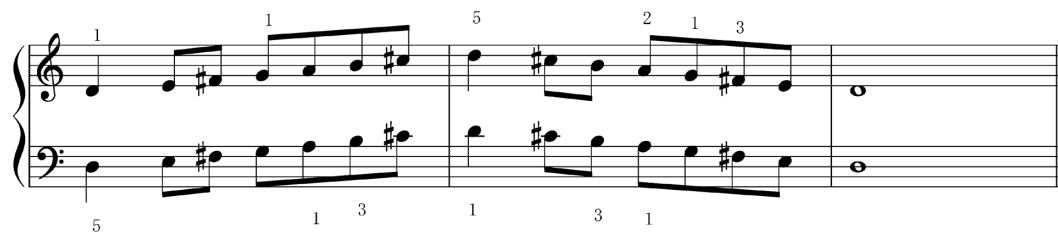


図9 指の運動7の3



図10 指の運動9



図11 指の運動10

・指の運動－8（指くぐり） 指番号1と2を中心とした指くぐりの基本練習（図12）。5本の指で足らなくなる場合、必ず親指（指番号1）を中心にくぐらせることを理解する。また、不適切な指使いでは弾きにくくなり、自分で正しい指使いを見つけていく必要性も理解させていく。

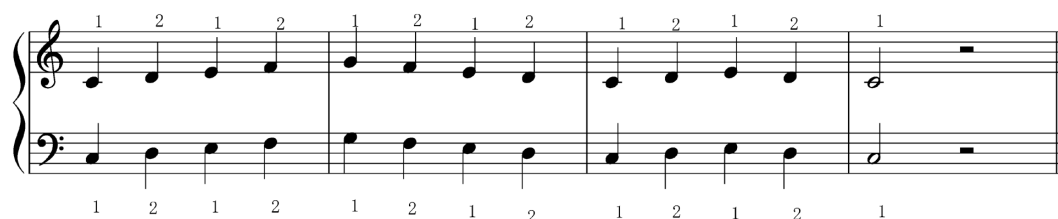


図12 指の運動8の4

4.2 授業による効果

I回生には授業の始まりに毎回10分間の指の運動を説明を加えながら行った。前期に行ったのは、1を2回、2を2回、3を3回、5・6を2回、8を1回である。また、ピアノ練習の最初に必ず5分間これを実行していく指示も行った。それを踏まえて6、7月に2回の実技テストを実施した結果、6月（指の運動1・2・3）では80%が合格、7月末（指の運動）では90%が合格となった。また、音の長さをしっかりと理解をすることで指がスムーズに動くことも、前述のテスト結果と比較してわかった。今年からの取組のため、Music Workbookを使わなかったII・III回生との対比はできないが、指導者は、指の動きが短い期間でスムーズになりまた音も力強くなったと感じている。後期には付点と音階を中心に

実施をして、子どもの歌の練習につなげていきたい。また、音符の長さがまだ確実に理解できていない数名の学生には、このエクササイズを繰り返し練習することでその理解を徹底したい。

5. おわりに

ピアノ初心者だけではなく音楽を学んできた学生にも音楽の基礎的理論において、さらに理解を深めていくことのできる内容として示していくために、どのような表現や表示方法とするかに大変時間を要し、随分意見の違いも見られたものである。音楽の基本中の基本となることを当たり前のように理解している者にとっては、わかりやすくシンプルに表現と表示をすることにはそれぞれの多様な意見があり、その難しさを改めて感じることもあった。

ピアノの演奏をするということは「楽譜を深く理解して読むことができ」同時に「両手の指先の動きをコントロールして音楽的時間を刻んでいくこと」といえる。初心者にとってはその片方ごとのスキルアップを目指すことが必要だが、多くの学生はピアノが難しいとのひとくくりで判断しがちである。各学生がピアノ練習で困難に感じる部分では、様々な要因をあげることができる。音符の読みに時間がかかったり、指使いが不安定だったり、リズムがとりづらかったり、両手を動かすとどちらかに偏って間違ったりとあげればきりがなく多様である。そういった困難となる箇所では「何が原因となっているのか」を的確に見つけ出し、そのための解決方法を工夫しながら練習していくことが必要である。この点を見出すことなくひたすら練習することは時間と体力の浪費となりがちでありそのことに早く気づいていけるようにならねばならない。現在、この教材を作成し学生に用いた最初の半年であり、音楽の基礎的学習の成果にはこれまでにない手応えを感じているが、今後の充実した練習への指導方法に対してこの教材の用い方をさらに工夫し利用していきたい。

参考文献

- 1) 青山雅哉・小川純子・上野稲子(2014)「Music Workbook」. 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行.
- 2) 青山雅哉(2009)「ピアノ教則本の特徴 I」. 奈良文化女子短期大学紀要40: 1-8.

